

令和 2 年 4 月 13 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02242

研究課題名（和文）インド・ミャンマー国境に暮らすナガのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究

研究課題名（英文）Singing Culture of Naga Tribes in Nagaland State, Northeast India

研究代表者

岡田 恵美（OKADA, Emi）

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：60584216

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ナガの各民族の言語や居住地域の地形・生活様式は多様であり、歌唱文化や使用楽器においても各々の特徴がある点が明らかとなった。ポチュリやサンタム・ナガの村では真鍮製の気鳴楽器など他地域との交流・交易の中で定着した楽器類も見られたが、一方でチャケサン・ナガは山岳地帯に暮らし、使用楽器はタティと呼ばれる一絃琴が歌唱伴奏に用いられるのみである。その分、リと呼ばれる伝統的な歌唱文化が日常生活の中で息づき、農業機械が導入されていない棚田では、同世代の集団ムレで農作業を協働し、農作業中に共に歌い、そのポリフォニックな音楽構造や集団で歌い協和音を生む行為が、彼らの相互扶助の社会構造や協働性と密接に関係している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、南アジアにおいて稀少なポリフォニー（多声的合唱様式）の民謡が歌い継がれているインド北東部の山岳民族ナガの伝統的な歌唱文化を対象とし、その音楽的構造や歌詞、歌唱法、社会文化的脈絡を現地調査から考察し、歌の機能と協働性について追究したことに学術的意義がある。ナガの音楽文化は、長年の独立紛争や軍事弾圧によって、現地調査を伴う学術論文が極端に少なく、本研究での成果は、学術雑誌のみならず一般雑誌や講演で幅広い層に発信を行った。日本では労働歌など生活に息づいた伝統的な歌唱文化が本来の脈絡で伝承されることはなくなったが、今尚、農作業や相互扶助の社会で生き続けるナガの歌唱文化への関心の高さを感じた。

研究成果の概要（英文）：The Nagas are an aggregate of several tribal minorities of Indo-mongoloid origin and most of them live in the hilly areas near the Indo-Myanmar border. Each Naga has different languages and culture. The Chakhesang Nagas comprise one of the major ethnic groups in the region and have a rich heritage of choral folk songs in Chokri language called Li handed down from generation to generation. While working together at rice field, they stack their polyphonic voices continuously. Li is an indispensable medium in the village community as a means of maintaining good relations.

研究分野：民族音楽学

キーワード：ナガ 民謡 ポリフォニー 少数民族 インド北東部

1. 研究開始当初の背景

ナガはモンゴロイド系の山岳民族で、インド北東部ナガランド州（図1）とミャンマー北西部のナガ自治区に多く暮らしている。ミャンマー側では、2008年の新憲法において、インドと国境を接するザガイン地方域のレーシー郡、ラヘー郡、ナンユン郡の3郡にナガの自治権が認められ、自治区の総人口は約11.7万人（2014年ミャンマー国勢調査）である。またインド側の2011年の国勢調査に依拠すれば、ナガランド州内のナガは約166.8万人で州人口の84.2%を占め、インド憲法第342条に基づき保護政策対象の民族に指定されている。ナガと一口に言っても実質は複数の少数民族の集合体であり、2020年現在、ナガランド州政府は図2に示した14の少数民族をナガとして公式認定し、各社会では共通言語であるナガ語の他、独自の言語や風習、文化が継承されている。



図1 インド北東部ナガランド州

	インド側ナガの民族		ミャンマー	ミャンマー側ナガ	
	民族	人口(人)		民族	人口(人)
インド	1	コニャク・ナガ	237,568	レーシー郡のナガ	16,290
	2	セマ・ナガ	236,313	ラヘー郡のナガ	48,756
	3	アオ・ナガ	226,625	ナンユン郡のナガ	51,906
	4	ロタ・ナガ	173,111	計	116,952
	5	チャケサン・ナガ	154,874		
	6	アングミ・ナガ	141,732		
	7	サンタム・ナガ	74,994		
	8	ゼリアン・ナガ	74,877		
	9	イムチェンゲル・ナガ	66,972		
	10	チャン・ナガ	64,226		
	11	レングマ・ナガ	62,951		
	12	キアムンガン・ナガ	61,647		
	13	ボム・ナガ	52,682		
	14	ポチュリ・ナガ	21,948		
	その他	17,192			
	計	1,667,712			

図2 ナガの各民族と人口
(インド 2011 年国勢調査,
ミャンマー 2014 年国勢調査)

ナガの歴史を概観すれば、19世紀後半には英国による統治がナガの山岳地域にまで及び、列強支配の中で様々な少数民族の「多様の統一」が強化され、「ナガ」という民族概念自体も、近代政治の産物と言って過言ではない。第2次世界大戦下の1944年のインパール作戦では、その南部の居住区域は大日本帝国陸軍と英国軍の激戦地となり、列強支配が生んだ苦難の歴史を辿ってきた。戦後、ナガはインドやビルマからの分離独立を標榜して1947年にナガの独立を宣言するが、諸外国に承認される事はなく、英国の割譲によってその居住区域は国境線で分断される結果となった。それ以後は独立運動が闘争へと発展して、ナガ自治軍や武装組織対インド軍との武力衝突が激化し、1997年のインド政府との停戦合意まで緊張関係が続いた。

こうした長年の闘争や弾圧によって、インドでは「ナガランド州 = 紛争地域」というイメージが定着し、事実、治安上の問題からナガランド州への外国人の入域は制限され、ナガを対象とした現地調査を伴う研究は非常に困難な状況下にあった。しかしながら、1990年代からのインドの経済自由化政策やグローバリゼーションの加速は、ナガ社会にも影響を及ぼし、2000年代に入ると州政府を中心に様々な経済振興政策やそれに付随した観光推進政策が打ち出されるようになった。その結果、2011年の規制緩和に伴って外国人の自由な入域が可能になり、申請者は2012年から2016年の本研究の開始前までに、ナガの若者達が集まる音楽祭に着目して、90年代以降の急激な社会経済的変動の中で変容する彼らのポピュラー音楽文化や教会音楽文化、そしてその文化的アイデンティティやインド本土との差異意識について、州都コヒマを中心に調査を実施してきた。そうした調査や研究で得た、ナガの現代の音楽状況に対する知見を活用した上で、本研究では伝統的なナガの民謡文化に焦点を当てた。

2. 研究の目的

本研究は、極めて稀少なポリフォニーの民謡が歌い継がれているナガの伝統的な歌唱文化を対象とし、第一に各少数民族の伝統的な民謡の構造や歌詞、歌唱法、その社会文化的脈絡を調査・分析し、各社会における歌の機能と協働性について読み解くことを目的とした。近年インド側のナガ社会では、長年の独立紛争や軍事弾圧によって低迷した地元経済の復興を目的に、州政府の音楽振興政策や芸能の観光資源化が進行しており、伝統的な民謡をポピュラー音楽と融合させた新たな音楽も誕生している。本研究では第二の目的として、こうした民謡へのまなざしの変化に着目し、大国インドの辺境で民族・宗教的にもマイノリティなナガの人々が、歌を通してローカリティを再生産していく様相を明らかにした。

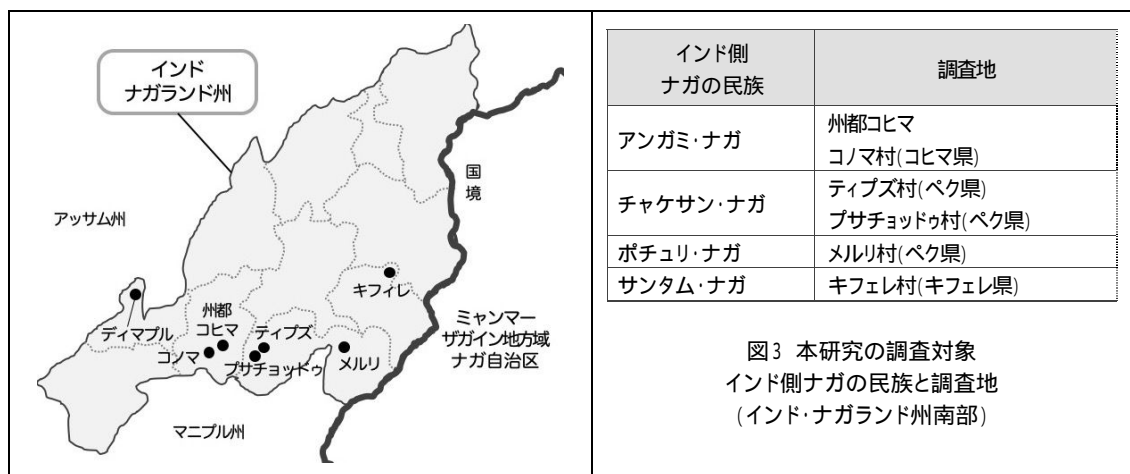
3. 研究の方法

本研究の4年間(2016年度~2019年度)を通じて、ナガランド州に暮らすナガの中からアングミ・ナガ、チャケサン・ナガ、ポチュリ・ナガ、サンタム・ナガの4民族についてその民謡や歌唱文化について調査を実施した。現地調査では伝統的な民謡の実践の場面を録音・撮影すると同時に、多様な年齢層へのインタビューも行なった。

研究の第一段階では、人類学や音楽学の分野を中心に資料収集や文献調査を進めた。人類学分野におけるナガに関する先行研究の大部分は、英国統治時代に書かれた英国人の人類学者 J.H. ハットンのアンガミやセマに関する文献 [Hutton 1921] や、J.P.ミルズのロタ [Mills 1922] やアオ [1926], レングマ [1937] についての研究書が占め、キリスト教化する以前の各少数民族の伝統的な社会構造や言語、風習についての知識が深まった。またナガ出身の人類学者 N.ヴェヌによって 2014 年に刊行された *People, Heritage and Oral History of the Nagas* では、民謡に関する分析的な記述はないものの、インド側の 10 の少数民族の歴史や村の共同体の構造に加え、各社会で伝承されている民謡が複数紹介されていたため有益な参照資料となった。次に音楽学の分野では、ジョージア (旧グルジア) 出身の J.ジョルダーニアの近年の研究である *Choral Singing in Human Culture and Evolution* を参考に、アジアのポリフォニーのみならず、他地域の伝統的なポリフォニー歌唱に関しても比較対象としてそれぞれの音楽的特徴について理解を深めた。

現地調査では、ナガランド州都のコヒマ (図 3 参照) や周辺の農村部コノマ村ではアンガミ・ナガの民謡について調べ、ペク県のティプズ村やプサチョッドゥ村ではチャケサン・ナガのチョクリ語圏の民謡や、同じくペク県のメルリ村ではポチュリ・ナガの民謡、そしてキフェレ県キフェレ村ではサンタム・ナガの民謡を対象とし、実践の場や年長者から若年者への教習の場面を、情報提供者の許可を得た上で撮影した。当初の研究計画では、ナガランド州の広範囲にわたって、多数のナガの民族の調査を進める予定ではあったが、第一に調査可能な 8 月が雨季で山岳地帯に特有の悪天候や土砂崩れ等の劣悪な道路状況や、また第二に一旦調査を進行する中で、ポリフォニーの歌唱文化が特に南部のナガに特徴的であることが分かり、研究 2 年目からは、ナガランド州南部のナガに焦点を絞ってより深く時間をかけて調査を行う方向へと変更した。

撮影した歌唱の場面やそこでの民謡は、レパートリーを採譜した上で、音楽的構造 (楽曲構造、旋律、音階、リズム) や協和音を生み出すメカニズム、歌唱・発声法、歌詞内容・詩型・韻律や、民謡が歌われる社会文化的脈絡についてインタビュー調査を通して考察した。



4. 研究成果

本研究を通して明らかとなった点は以下である。

第一に、ナガと一口に言っても、各民族の言語や居住地域の地形・生活様式は多様であり、歌唱文化や使用楽器においても各々の特徴が見られる点である。ポチュリ・ナガのメルリ村やサンタム・ナガのキフェレ村では真鍮製の気鳴楽器など他地域との交流・交易の中で定着した楽器類も見られたが、一方でチャケサン・ナガの居住地域は地形的にも起伏の激しい山岳地帯であり、使用楽器は「タティ Tati」と呼ばれる一絃琴が歌唱の伴奏に用いられるのみであった。その分、伝統的な歌唱文化が日常生活の中でも継承され、農作業の周期に沿って行われる収穫祭や、年配者においては日常生活の様々な場面で、2 声から最大混声 8 部合唱の形態で伝統的な民謡が歌われている。その音楽的特徴は、4 拍子の拍節リズムの歌ではタティの伴奏で C-E-G-A-C の 4 音音階が用いられ、他方、自由リズムの歌では無伴奏で C-D-E-G-A-C の 5 音音階が使われ、長 2 度の音幅の大きい高速のヴィブラートや完全 4 度の協和音が多用されていることが明らかとなった。またチャケサン・ナガの民謡は、歌詞の側面においても規則性があり、上句 4 音節・下句 5 音節の定型詩を原則とし、その内容は村の英雄の讃歌や恋愛歌、自然賛歌、友情の歌、死者を弔う歌など多岐にわたる。元来、無文字社会で記譜法を持たない彼らにとって、歌は村や民族の歴史の記録そのものと言える。

また、チャケサン・ナガにおいて伝統的な歌唱文化が継承されている理由として、彼らの大多数が棚田での農業を生業としており、農業機械が導入されていない棚田では、「ムレ」と呼ばれる同世代の集団で農作業を協働して行い、農作業中にポリフォニーで声を重ね、共に歌い、共に生きるための相互扶助として歌唱するという行為自体が一つの媒介となり、言い換えれば、そのポリフォニックな音楽構造や集団で歌い協和音を生み出す行為が、彼らの社会構造や協働性と密接に関係していることが見えてきた。

第二に、比較的、歌唱文化が伝承されているチャケサン・ナガの農村部においても、進学や雇用を求めて若者の都市部への流出が進み、今後の伝承に課題が生じていることも明らかとなった。調査を実施した一つの村では、大都市での伝統芸能祭や民謡コンテストへの参加を起爆剤として、年長者から若年層へと民謡が口頭伝承されていたが、もう一方の村では、伝統的な村祭や風習は形骸化し、民謡の伝承は危機的状況にあった。歴史的に見れば、伝統的なナガ社会は、首狩りの風習やアニミズム信仰をもつ父系制の原始共産制社会であったが、1872年に米宣教師E.W.クラークがナガの地で最初の洗礼を施し、村単位でキリスト教化が進行していった。現在ナガの9割以上がキリスト教徒で、その大多数は敬虔な米系バプテスト信者である。村や各民族の共同体は今日においても希薄化することはなく、都市部においてはバプテスト教会が各少数民族のコミュニティの拠点として機能している。これは、バプテストの特徴である会衆制や各教会の自治承認が、旧来の村の共同体組織と合致し易かったという点や、伝統的なポリフォニーの民謡から各々の言語で歌われる4声の賛美歌へと形を変えながらも、協働して声を重ねるといった行為自体は失われていない点が指摘できる。しかしながら、こうした賛美歌やゴスペルといった教会音楽の普及や教会付設の学校教育は、伝統的な民謡やその歌唱文化の存続を揺るがしているのも事実である。学校の教員は地域出身者でないことも多く、若者や次世代へ民謡や豊かなポリフォニーの歌唱文化を継承していく場や機会が極端に減少している。

本研究を通して、更なる今後の研究課題として、第一にいかに伝統的な民謡・歌唱文化を次世代へと継承していくかという伝承問題やその教育資源化について浮かび上がった。また本研究では、インドのナガランド州南部に焦点化したのが、今後は隣接するマニプル州北部に居住するナガの音楽文化とも比較的調査する必要性を感じている。なぜなら、ナガランド州は州政府主導の民族芸能祭の主催等を通して、伝統的文化の観光資源化やその活性化の動きが顕著であるが、マニプル州ではナガは州全体において民族的にマイノリティであり、その文化の特徴や伝承状況について現地調査を通して考察し、民謡に込められた人々の想いや営み、歌と社会の構造、そしてグローバル化時代のローカリティという意識の側面にも着目しながら、今尚、途上の状況にあるナガの音楽研究の発展に今後も貢献したいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 94
2. 論文標題 「インド北東部ナガランド州の音楽教育：なぜインド国内で最も西洋音楽教育が浸透しているのか」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』（琉球大学教育学部）	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 48巻2号
2. 論文標題 「現代インドの若年層における北インド古典音楽学習者の増加とその要因」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『音楽教育学』（日本音楽教育学会）	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 Vol. 50
2. 論文標題 "Review: Up Down & Sideways: Kho ki pa lu."	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Yearbook for Traditional Music (International Council for Traditional Music)	6. 最初と最後の頁 244-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 第92集
2. 論文標題 「台湾原住民にみる伝統文化教育と音楽を通じた新たな文化継承の形：台湾原住民ブヌンの事例を中心に」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』（琉球大学教育学部）	6. 最初と最後の頁 211-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/20.500.12000/39208	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 第81号
2. 論文標題 「ポップカルチャーとしての民謡の再興：インド少数民族チャケサン・ナガの多声的合唱「リ」の事例から」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『東洋音楽研究』（東洋音楽学会）	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 NA
2. 論文標題 「人はなぜ共に歌うのか」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 映画パンフレット『あまねき旋律』（映画配給会社ノンデライコ）	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 第23号
2. 論文標題 「第22回 みんなくワールドシネマ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『社会科NAVI』（日本文教出版）	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 2019年11月号
2. 論文標題 「棚田に息づくポリフォニーの歌」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『月刊みんなく』2019年11月号（国立民族学博物館）	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田恵美
2. 発表標題 音楽学のフロンティア
3. 学会等名 東京藝術大学音楽学部「音楽学のフロンティア」シリーズ（東京藝術大学）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡田恵美
2. 発表標題 北インド古典音楽の仕組みと美学
3. 学会等名 アジア・太平洋文化ネットワーク（Asia-Pacific Cultural Network）クロストーク（国立劇場おきなわ）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田恵美
2. 発表標題 「グローバル化時代におけるローカリティの生成：インド北東部ナガランド州の観光・音楽振興政策とナガの若者に見る文化的アイデンティティの変容から」
3. 学会等名 2016年度MINDUS第3回合同研究会（国立民族学博物館）（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岡田恵美
2. 発表標題 「インド北東部チャケサン・ナガと民謡『Li』」
3. 学会等名 冲印友好協会主催 沖縄県立芸術大学国際交流事業『インド：生活に息づく芸術』（沖縄県立芸術大学）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田恵美
2. 発表標題 「映画『あまねき旋律』解説：インド北東部チャケサン・ナガと民謡『Li』」
3. 学会等名 みんなくワールドシネマ（国立民族学博物館）（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 インド文化事典編集委員会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 808
3. 書名 『インド文化事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考